第1回YKN企画

緑月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＹＫＮのＹＫＮによるＹＫＮのためのｓｓ

目次

くらえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ！チームでリーグなトーナメント！ ―― 1

くらえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ！チームでリーグなトーナメント！２っ！ ― 14

食らえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ！チームでリーグなトーナメント！３っ！ ― 25

食らえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ！チームでリーグなトーナメント！４っ！ ― 35

くらえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュを一っ！チームでリーグなトーナメント！

プロローグｅｐ．１

〜〜〜

〜〜〜

「この地の輩どもの実力把握を行え。手段は問わんが怪しまれず、確実に…だ。」

「…なんて言われましたけど、どうしましょうか？」

「怪しまれないようにと言われても、って話ですよね。やり方なんてこっちから仕掛けるか仕掛けられるのを待つかですし。後者の方は好きじゃないですけど。」

「……別に待ってりゃよくない？期限指定されたわけじゃないんだし、どのくらいやればいいかなんて聞いていないし。」

「ふむ…ならば儂が一つ提案してもよいか？」

「おや、何か案があるのですか？」

「うむ、先日ここ幻想郷とやらの地形調査をオロメス殿に頼まれたのだがな…どうやら人里という場所にコロシアムがあるらしい。」

「コロシアム……あぁ、そういえば他の世界にも時々それらしいのがありましたね。全部滅ぼしていたのであまり知りませんけど。」

「まぁそうじゃろうな、して実力把握を行うには丁度良いのではないかと思うのじゃが…」

「なるほど、ウランステルさんの言いたい事が分かりましたよ。」

「そうか、では善は急げ。早速コロシアムに向かおうではないｋ

「つまりそこの運営を乗っ取ってここの住民達を戦わせようという事ですね!」

「え?いや待つのじゃエスヒラ殿。儂が言いたいのはそうではなく…」

「ではパレスロビアさんは住民達にコロシアムへの招待状を書いてください。数は任せます。内容は…そうですね。無い記念日を作ってそのお祝いで特別な大会を開くみたいな趣旨で。それとあなたの能力で住民がその招待状を開いて最後まで読んだら強制的にコロシアムに飛ばされるように仕掛けてもらえます?無視される可能性がありますので。セイレムヨーライさんはその招待状を色んな住民達に配っていってください。サボらないでくださいね?あぁでも今すぐにというのは難しいかもしれませんね。やっぱり少し間を置いてから開催する事にしましょうか。すぐに飛ばされるのではなく期日に飛ばされるようにしてもらいましょう。そうですね…一週間後なら十分でしょう。では私はコロシアムとやらの下見をしてきますね。」

「エ、エスヒラ殿…」
「……諦めろウランのおっさん。あいつ前々から勘違いから動くやつだし。」
「ですね。もう行ってしまいましたしあれはやる気満々ですよ。実力把握が出来る事には変わりないんですしいいんじゃないですか?」
「……巻き込まれる住民達よ。すまぬ、儂のせいで…」
〜〜〜
かくして、とある悪党達の陰謀から…いや、とある男の誤解からＹＫＮの集結するトーナメントが開催される事になった。果たしてこの物語の末に何があるのか…
プロローグｅｐ．１　終
プロローグｅｐ．２
〜〜〜
「手紙…?珍しい。どこの誰がこんな物を…見てはおくか。」
『元気にしていられるでしょうか。私はコロシアムの運営者です。この度なんとコロシアム入場者１０万人を突破しました。ここまで運営を続けられたのも当コロシアムまで足を運んで下さった皆様のおかげです。つきましては私どものそんな感謝の意思を表明したく、◎月?日、特殊なルールでの大会を開きたいと思います。当日、この手紙を持参して是非来てください。きっとあなたのいい思い出になります。』

「………くだらん。めでたい事かはさておき、何故平穏を望む私がこのようなものに出向かなくてはならん。私が行かなくとも他の戦闘好きがいるだろう…」

〜〜〜

「大会…つまりそこに行きゃあたしを殺せる奴と出会えるかもしれねぇって訳か。ギヒヒ…いいぜ、行ってやろうじゃねぇか!当日が楽しみだぜ!ギヒヒヒヒ…」

〜〜〜

「コロシアム…幾度か訪れた事はある。力を衰えさせる事のないよう、これをいい機会としよう。さて、修行をせねば…」

〜〜〜

「大会…もしここで優勝したら、クナイを皆にアピール出来るチャンスなんじゃや!?よーし、頑張るぞーー!」

〜〜〜

「……いや普通に嫌なんだが。私守る事しか出来ねぇのになんでこんな催しに…1回コロシアムに行ったから目をつけられたのか?いやあれは観戦する気で行ったのに戦わされたし負けるし…絶対行かない、うん。」

〜〜〜

「コロシアム…か。あまり戦いを好むわけではないが…最近はグールとしか戦えなくて

満足に出来ないからな。久々に全力を出せそうだ…」

〜〜〜

「コロシアム…？ちっと調べてみるか…。………はーん、戦う場所って意味か。……行ってみるか？帰る術も分かんねぇしする事もないし。」

〜〜〜

「こいつは…いい機会だな。この大会とやらで勝てば世間の目がオレに向いてくれる…そしてオレが天下統一のような事が出来るってもんだ。やってやろうじゃねぇか…」

プロローグｅｐ．２　終

このｓｓについて

この物語はＹＫＮ全員に出番を与えたいという思いと某ＭＵＧＥＮ動画投稿者の動画を見てやりたいなという思いから出来たものです。先に言わせてもらうと完結するかは分かりません。まずかなりの長編になるのは確かですし私のやる気が続くかの問題になります。（）なので今ある艦これｓｓと同様、終わりの見えないｓｓとして見てやってください。

ルールは以下となります。

・このトーナメントは２人でタッグを組んでチーム戦を行ってもらいます。リーグ形式で２リーグです。

・パートナーから半径２０ｍ以上離れたらアウトです。石化して強制終了となります。

・ＹＫＮ全員平等に出番を与えるのが目的なので勝ち抜きだけではなく負け抜きも同時に行います。つまり1回戦目で負けても負け抜きの方で2回戦目があります。どのＹＫＮでも2回は戦えます。

・平等に出番をと言いましたがＹＫＮの中には戦えない、あるいは戦えるか分からない者もいるのでそれらは除外します。除外するＹＫＮ達は以下の通りになります。

ＹＫＮ．９　１５　２０　２３　２４　２７　２８　３７　４０　４６　６２　６３

このキャラ達は観戦枠とします。

・能力の制限はありませんが戦いやすくするために一部のＹＫＮに補正を付けます。

＊ＹＫＮ．４７の能力はどんな攻撃も傘で防ぐとありますが元からの彼女は傘は一つしかなく破壊されたら詰みなので傘を生成出来るように

＊ＹＫＮ．１８は一応艦娘なので燃料、弾薬は尽きないように

尚、ＹＫＮ．３２の能力は体を矢に変えるというものですがルール違反にはなりません。

・別に普通に戦って倒してしまっても構いません。

・１リーグ１６組、計３２組で総６４名が出場者です。
出場チーム公開
（※チーム分けは某ツールで行いました）
チーム１　素直になれないｃｌｅｒｇｙｍａｎ
ＹＫＮ．４９　久遠寺　紫音＆ＹＫＮ．５３　ラステリア
チーム２　青い腕
ＹＫＮ．１２　群青＆ＹＫＮ．３０　捕食者
チーム３　温暖色に結ばれたい
ＹＫＮ．５２　紅瀬　緋紗子＆ＹＫＮ．５７　裁縫師
チーム４　昼寝愛好家
ＹＫＮ．３３　ツバキ＆ＹＫＮ．５５　戦士
チーム５　追い続ける刃
ＹＫＮ．１３　チェンカー＆ＹＫＮ．３６　追跡者
チーム６　ミストロボット
ＹＫＮ．５１　Ｃｙｒｉｘ＆ＹＫＮ．６５　ウランステル
チーム７　ツンデレの謎
ＹＫＮ．２２　無津義羅　彩斗＆ＹＫＮ．７１　不知火　華月

８　くらえＤＩＯっ!半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュを一っ!チームでリーグな
メント!

チーム８　落ちない雷
ＹＫＮ．７３　澪＆ＹＫＮ．７５　シーダ
チーム９　無邪気な正義
ＹＫＮ．６７　スティグマ＆ＹＫＮ．７０　ミルシュカ・クロドヴィラ
チーム１０　爆発する熱
ＹＫＮ．３１　Ｗｉｔｔｙ＆ＹＫＮ．６０　ジョリオン＝バーネット・カストグ
チーム１１　千変万化な艦娘
ＹＫＮ．１８　緑月＆ＹＫＮ．６４　偽西方の導師　セイレムヨーライ
チーム１２　怯えるデコイ
ＹＫＮ．５（６）　ロジカ（ラミ）＆ＹＫＮ．３５　ミラージュ
チーム１３　摩訶不思議な犬
ＹＫＮ．７　ルマ＆ＹＫＮ．２１　獅我璃魔　鳴歌
チーム１４　弓術・プロトタイプ
ＹＫＮ．３２　弓術士＆ＹＫＮ．４３　ナビゲーションロボットプロトタイプ
チーム１５　血塗れの乙女
ＹＫＮ．４２　静海　寝音＆ＹＫＮ．６１　血幽遠なる者たちの僭帝　オロメス
チーム１６　従う鉱石

ＹＫＮ．２９　鉱山作業員＆ＹＫＮ．４４　従ニ　文華
チーム１７　陰陽スケボー
ＹＫＮ．２　天間屋敷　光斬＆ＹＫＮ．５４　小日向　渚
チーム１８　大きな隠し手
ＹＫＮ．２５　侍＆ＹＫＮ．７２　御子柴　香織
チーム１９　炎の色
ＹＫＮ．２６　姫＆ＹＫＮ．５６　焔
チーム２０　深海からの傍観者
ＹＫＮ．１１　真紅＆ＹＫＮ．１９　深海望月
チーム２１　苦労人
ＹＫＮ．８　アンヘル＆ＹＫＮ．４５　初鹿　一華
チーム２２　騒がしいエンジョイ勢
ＹＫＮ．１０　ライリ＆ＹＫＮ．４７　紅露　七海
チーム２３　独眼の糸
ＹＫＮ．５９　ヴァレリカ＆ＹＫＮ．７７　伊達政宗
チーム２４　手加減なしの監視塔
ＹＫＮ．４１ＰＺ―０９９９＆ＹＫＮ．７５　サグニス・ラルド

チーム２５　鋭いスナイパー
ＹＫＮ．１６　シロウ・ミュリエル・シーグヴァルド&ＹＫＮ．５６　破錠　園望
チーム２６　静かな軍人
ＹＫＮ．１　ユウ&ＹＫＮ．７４　不知火　未月
チーム２７　魂を司る鬼神
ＹＫＮ．３８　死霊術師&ＹＫＮ．５０　不知火　冥
チーム２８　ＵｎｋｎｏｗｎＲｏｓｅ
ＹＫＮ．６６　メラン&ＹＫＮ．６８　無名
チーム２９　害なきクナイ
ＹＫＮ．３　熊野御堂　聖月&ＹＫＮ．３９　破錠　忌夢弥
チーム３０　重力と聖女
ＹＫＮ．４　ストレリア&ＹＫＮ．４８　連城　瑞花
チーム３１　痺れる徒手空拳
ＹＫＮ．３４　りく&ＹＫＮ．６９　相楽　左之助
チーム３２　触れてはいけない探究心
ＹＫＮ．１４　ハドナー&ＹＫＮ．１７　りょく
対戦表

リーグ１
無邪気な正義ＶＳ弓術・プロトタイプ
怯えるデコイＶＳ騒がしいエンジョイ勢
大きな隠し手ＶＳ手加減なしの監視塔
苦労人ＶＳ重力と聖女
血塗れの乙女ＶＳＵｎｋｎｏｗｎＲｏｓｅ
炎の色ＶＳ魂を司る鬼神
独眼の糸ＶＳ痺れる徒手空拳
昼寝愛好家ＶＳ従う鉱石
リーグ２
温暖色に結ばれたいＶＳ追い続ける刃
落ちない雷ＶＳ爆発する熱
陰陽スケボーＶＳ素直になれないｃｌｅｒｇｙｍａｎ
害なきクナイＶＳ青い腕
鋭いスナイパーＶＳミストロボット
ツンデレの謎ＶＳ摩訶不思議な犬
触れてはいけない探究心ＶＳ静かな軍人

深海からの傍観者ＶＳ千変万化な艦娘
次回第1回戦　無邪気な正義ＶＳ弓術・プロトタイプ
←←←おまけ←←←

「ＹＫＮ．２３と」
『ＹＫＮ．２４のー!』
「『第1回ＹＫＮ企画番外編、ＹＫＮの全て（ー!）』」
「という事で皆さん初めまして。ＹＫＮ２３ことひびｋ…おっと、未だ名前が作られない盗賊だよ。」
『初めまして!同じくＹＫＮ２４、ドラｋ…じゃなかった、料理人だよー!』
「さて、この番外編の事について軽く説明するよ。このコーナーでは主に僕達２人がＹＫＮに所属する皆を紹介していくよ。」
『キャラ説明鯖には載らなかった事や、あんな事やこんな事をこの番外編で晒してい

くって感じだね！若干メタい所にも触れていくよ！』
「僕達２人は出番が無くなってしまったからね、その代わりということで中の人が用意してくれたコーナーだよ。」
『私達以外にも回を重ねる毎に出番が無くなったＹＫＮや出番のあるＹＫＮの誰かがゲストして来るって！』
「もし本編が失踪なり中止になったとしてもこのコーナーは続けるのが中の人の意志らしいね。」
『紹介する順番はＹＫＮ１からになっているよ！』
「紹介は本編と同様、次回からになるよ。」
『て事で次回をお楽しみにー！』
「さようならー。」

くらえＤＩＯっ!半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ!チームでリーグなトーナメント!２っ!

リーグ1　第1回戦　無邪気な正義ＶＳ弓術・プロトタイプ

無邪気な正義チーム控室

「わーい!ふっわふわー!」（ベッドで跳ねてる）

「………。（心の声　あの人…さっきから見ていても成人女性には見えない動きをしている…。どういう事なの……それにしても、さっきから状況が分からない。一週間前、変な招待状が渡されて…無視する気でいたのに、ここに飛ばされて…しかも色んな人達がいた。どうするのが正解なんだろう…」

『これより、第1回戦を行います。無邪気な正義チームと弓術・プロトタイプチームはフィールドに来てください。』

「（っ…呼ばれた…というか、なんなのそのチーム名…考えた覚えはない、運営側が決めた…?ううん、どうこう考えるのはやめよう、とにかく今は行かなきゃ…）あの、ミルシュカさん…呼ばれたみたいです。」

「えー…もっとここで遊んでいたいのに…」

「……（大人…だよね、本当に？）」

〜〜〜

弓術・プロトタイプチーム控室

「へぇ、[redacted]はつまりあなた[redacted]以前の記憶が[redacted]いという事でし[redacted]うか？」

「そういう事になるな。……ところで、その…」

「あぁ、やっぱり[redacted]になりますか？」

「どうにも…な。明らかに傷以上のものがあるのだが…大丈夫なのか？」

「安心して[redacted]さい。元よりこの[redacted]態なので。」

「……そうか…」

『これより、（中略）弓術・プロトタイプチームはフィールドに来てください。』

「む…出番か。これをきっかけに何か思い出せるものがあればいいのだが…」

「そうなってく[redacted]ればいいですね。行き[redacted]しょうか。」

〜〜〜

コロシアム　フィールド上

「んーっと…あそこに居るのが相手なのかなぁ？」

「恐らくは…（何かあっちにもヤバそうなのがいる…というか、既にボロボロになっているような…）」

「あれが対戦相手だな…しまった、少しは作戦を練っておくべきだったか…」

「まぁ相手の[redacted]い方を見てでも遅く[redacted]いでしょう。しかし、私はた[redacted]の案内ロボなのですが…[redacted]えるものですかね?」

『両者、見合って……第1回戦、開始!』

～～～

まずは様子見。こっちから仕掛ける事は相方が出ない限りはない。バットを持ち、相方が動くまでは待つ。

相手の方は…一人が弓を構えている。遠距離タイプともう一人は…

～～～

「その…どう呼べばいいかは分からないがともかく、私は遠くから攻撃する方だ。ルールの事もあるし、君にはあまりここから動かずに戦っていてくれないか…」

弓を引き絞りながら仲間のロボにそう言い、矢を放つ。敵に直接当てる訳ではない。最後まで一直線には飛ばさず、一定の距離まで近づけた所で相手の周囲を回るように動かす。そうしている間にも、同時にまた自身の体から作った矢を番え、新たに放つ。自分に出来る唯一の行動。半永久的に放ち続ける矢は、敵の周囲を不規則に動き続ける。

ふと、ロボの方を見ると背中に取り付けてあるスクリーンから砂嵐が出ている。文字通りの砂嵐ではなく、テレビ画面に流れる砂嵐。それがスクリーンから出て、フィール

ドの要所にバラバラに散るように配置される。どうやらこのロボも近距離型ではないらしい。近づかれた際の事を考えておくとして、今は簡単に近づけない場を作り上げるとしよう。

～～～

「わぁ～…」

周囲を囲い続ける大量の矢にミルシュカは見惚れていた。戦いの場だというのに、どこか楽しげな彼女にとってその景色は楽しさを感じるのだろう。次第に集まる数え切れない矢。果たして彼女に対策はあるのか、進展がないと分からない。

～～～

隣で矢を飛ばし続けている中、既に壊れかけの機械もまた遠くから攻撃をしていた。背中についたスクリーンから出す砂嵐、別称ノイズは周囲の物を消す力がある。物だけでなく、人が触っても触った部分を消す力がある。弓術士に合わせるように、相手が自分達に簡単に近づかせない場を作るのだ。

～～～

「これは……」

周囲を埋め尽くそうとする矢とフィールドの要所に置かれた謎の何か。どうやら相手は両方とも遠距離攻撃型らしい。対してこっちは相方が何もせず見ている辺り、対策

する術はないのだろう。ならこっち側が近づかないといずれ詰んでしまう。バットから片手を離し、手から出す一枚の紙。〝これ〟が通用するかで、この状況を打開出来るか否か分かる。それを平べったい紙とは思えないような軌道と速度で矢の渦の中に飛ばし…

〜〜〜

「…っ……?」

ふと、チクリと走る小さな痛み。弓を止め、矢を動かす事だけに専念してその痛みの正体を探る。この状態で痛みを感じるという事は、飛ばした矢に何かしらの方法で攻撃されたということ。矢の間から相手の方を見ると、一人がバットとは別に、何かを持っている。よく見えないが、それを矢に向けて飛ばして…

「っ…何だ、これは…」

その時、また自分の体に小さな痛みが走った。相手にとって矢に攻撃しているのはただ道を開けるためなのだろうが、こっちからすれば微かでも攻撃が通されてしまう。彼女の放つ矢は体から作られたもの、すなわち矢が破壊、あるいは攻撃を当てられると本体にもダメージが入る。全て破壊する気かどうかは分からないが、近づこうとしているのは確か。矢の動きを一斉に相手に当てるようにして、先に倒さなければならない。

〜〜〜

「わわっ…！」

ついに無害から有害へと変わった大量の矢が自分達に襲ってきた。ミルシュカはそれに対してただ体術で払い落とすだけ。とはいえ数だけでなく様々な方向から来ている以上、全て払いきれるのは不可能。種族としての体力と耐久力で耐えようとすると、隣にいた相方がミルシュカの手を引き、お互い体に矢を受けながらもその矢の渦へと突っ込んでいった。

〜〜〜

相方の小さな声にふと視線を向ける。一見何もないように見えたが、相手の動きに何が起きているのかは察しがついたらしい。周囲の砂嵐と襲ってくる矢を後ろに二人共こっちに近づいてきている。対して機械は周囲に砂嵐を飛ばすのを止め、近づこうとする二人に直接飛ばす事にした。

〜〜〜

矢が後ろから、周囲と前から砂嵐が来る中相方を連れるように走る。矢の渦から抜け出したのはともかく、その代償に体のあちこちに矢が刺さってしまった。もう近づいて倒しきらなければこっちの体力が持たない。痛む傷に意思を固め、徐々に距離を縮める。バットをしまい、両手で紙を矢と砂嵐に向け飛ばす。自身の能力…貼りつけた物の存在を否定する事が出来る紙。矢はともかく、謎の物体に通用するか分からなかったが

今こうして近づけていられるから助かった。いつでもバットを持てるようにしながら、相方と離れないようにエスコートするように。二人の姿が少しはっきりと映るぐらいの所にまで来れていた。

〜〜〜

一つの戦闘全てを1パートに載せるのは読むのに時間がかかるかと思うのでここまで（ほんとは疲れただけ）。

第1回戦その２へ続く…

おまけのコーナー←

「盗賊と」『料理人の』

『第1回ＹＫＮ企画番外編、ＹＫＮの全て（ー!）』

「さて、こんにちは。ついに本戦が始まったね。中の人の事だからもう少し先になると

思っていたけど…」
『まぁまだ始まったばかりだから内容がまとめられたんだろうね!さて、こっちはこっちの仕事をしないと!』
「そうだね。前回も説明したけどこのコーナーでは本編に出番があるない関係なしに、YKNの皆を色々と紹介していくよ。」
『そしてこれも前回に載せたけど、今回は早速ゲストが来ているよー!という事でどうぞ!』
【はい、という事でこんにちは。多分誰も僕の事は知らないんじゃないかな。設定が出来なさすぎて放置されたYKN.9こと旅人だよ。】
「僕と喋り方が被っているのは目を伏せてくれると嬉しいな。さて、本編より長引かせたくないから早速紹介に移ろうか。」
『ちなみにこのおまけコーナーは今の所YKNを1話につき1人紹介する事にしているよ!もし本編が全員紹介するより早く終わりそうだったら何人かに変わるけどね!』
【という事で今回紹介するYKNは…YKNの原点、始まり。YKN.1のユウだよ。】
「実は名前が中の人の下の名前そのまんまになっているキャラだね。このキャラが出来た当時、中の人はなりきりを始めたてだったからか、オリキャラがよく分かっていなかったんだよね。」

『え、それ言っちゃって大丈夫なの?』
【別にいいんじゃない?姓名は明かしていないんだし、何なら色んなゲームのプレイヤー名にユウとかゆうとかいっぱいいるからね。更にＤｉｓｃｏｒｄでも1回言っていたし知っている人もいるんじゃないかな。】
「そういう事。画像元はＹｏｕ　Ｔｕｂｅの動画から来ているよ。何故か画像をＹｏｕ　Ｔｕｂｅから探していたからね。」
『能力は火や水、雷などの元素を操る、そして新たにスタンドの力を得てからはジョジョのあの鉄球とありとあらゆるものを作り出す力も使えるようになったよ!』
【おかげで一時期はキャラが増えても戦闘出来る枠やスト要員として出番があったけど、侍とかが来た辺りからは他のキャラに出番を取られて、今では艦これｓｓ〝響け轟音、その血と共に〟でしか出られなくなってしまった不幸なキャラだよ。】
「種族は画像にある通り吸血鬼だよ。性別は男、年齢は不詳。名前はユウになっているけど、実はこれは仮名なんだ。」
『この次の紹介に控えているＹＫＮ．２の天間屋敷光斬、彼の子孫に当たるのがユウって設定が後々出来たんだ!』
【その話は今テストプレイ中の艦これストで出てくるよ。前に言ったかもしれないけど、まだ終わっていないから出来るだけ早く終わらせて募集する気らしいね。】

「前にテストプレイしたのは去年の１０月中旬、これは付き合ってくれている人も怒っているね。この話は天間屋敷光斬を紹介する時にまた少しだけするよ。ここからはユウの過去についてちょっとだけ話すよ。艦これストで明かされる話よりちょっと前の過去物語だね。」

『元は人間だったんだけど、戦争で両親を無くし途方にくれていた少年時代に吸血鬼に眷属にされたんだ。だから正確には吸血鬼という種族ではなくて吸血鬼の力を使う事が出来る人間、というのが近いんじゃないかな？』

【その後、終戦後に金を稼ごうとするハンター達に主だった吸血鬼が殺され、隙を見計らって逃亡。説明出来る過去はここまでだね。】

「どこかありきたりな過去を持つ彼だけど、その後幻想郷に来てスタンドの矢に刺されてスタンド〝ブレイカー・ソルジャー〟が発現。その後また刺されてレクリエム化し、最終的に〝ブレイカー・ソルジャー・レクイエム〟、通称ＢＳＲになったね。けど彼の戦闘絡みはほとんどがボロ負けだよ。」

『レイドに参加してもストに参加しても活躍の機会なし、更には夏さんのキャラに一回の攻撃で数ロル秒殺…これは酷い。』

【中の人曰く、もう戦闘に使いたくないキャラらしいね。能力は強いはずなのに中の人の頭が残念なせいで…1回も勝った事がないんじゃないかな？】

「このトーナメントで頑張ってほしいね。ちなみに今のところその連敗がきっかけで病ませようとしているらしいんだけど、出番がないに等しいからそれはまだ先になりそうだね。」
『例えフリーダムで絡めなくなってもキャラを増やす。今の中の人ってそんな感じだからねぇ…』
【今はＹＫＮ．２０ことラムダと魔法の森で同棲しているよ。ＹＫＮのカップリングだね。】
「カップリングはまだ増やす気でいるらしいね。誰が誰とカップリングされるのかな果たして…さて、ユウの紹介はこんな所でいいかな。」
『て事で今回のおまけコーナーはここまで!次回はＹＫＮ．２、天間屋敷光斬の紹介だよー!お楽しみにー!』
【さようならー。】

食らえDIOっ！半径20m以内、エメラルドスプラッシュを一っ！チームでリーグなトーナメント！3っ！

リーグ1　第1回戦　無邪気な正義VS弓術・プロトタイプ　その2

「…っ、来るぞ！」
見えているだろうがそれでも隣の相方に注意を呼びかけ、至近距離に入ろうとする二人に弓矢を向ける。自慢するわけではないが、自身の得意とする戦法である敵の周囲を矢で埋め尽くし、バラバラに動かして撹乱しながら攻撃する布陣は簡単に破られる気はない。矢の一つ一つに目がついてはいないからどうやってあの二人が抜け出したかは不明だが、無傷のはずはない。確かに当たった感覚はあったからだ。恐らく、いや、確実に近距離戦に持ち込んで畳み掛けようとしている。ならばこちらが遠ざけるしかない。
「ついてこい、あいつらに私の矢を当てさせるようにこちらから誘導する！」
そう言って近づく二人とは別に真横の方へ駆け出す。多少近づかれたがあの二人の移動手段は足しかないらしい。ならすぐに追いつかれる事はないはずと信じ。すぐに自身の後ろについてくる存在を確認し、近づく二人と自身の間に大量の矢を挟むように

動かす。

〜〜〜

近づけていたはずの敵達が気づけば自分達と同様に走り出してきた。しかも後ろを追い続けてきた矢が二人に近づける最短ルートに入り込んできたおかげで迂闊に近づけなくなる。どうしようかと何かの紙を片手に隣を走る女の方を見る。同じ事を考えているのか、その表情は何かを考えていた。

〜〜〜

相方の声に砂嵐を出し続けるのをやめ、後ろから隣に並ぶように走る。見ると、追いかけていた二人の間に大量の矢が入り込もうとしていた。相方の考えを察し、自身はひとまず追いつかれまいと走るまで。まぁ走るというよりは浮いて、だが。

〜〜〜

「…!まずい…」

後少しで攻撃が届く範囲にいた敵達が逃げ出した。止まり続けるとは思っていなかったが、阻害するように後ろの矢が間に割り込もうとしてきたのは想定外だった。ここで引いてしまっても相手に余裕を与えるだけ。何としてもこの矢を乗り越えて攻撃しないといけない。否定する紙を複数作り、一枚一枚をくっつける。そうして出来た一枚の大きな紙を宙に浮かせ、進行方向にある矢目掛け飛ばす。そして加速してその紙の

影に隠れるように。大きくなった紙は当たってくる矢を次々に消していく。代わりに少しずつ小さくなるから完全に紙が無くなってしまうまでにこの大量の矢を突破しないと…。

〜〜〜

連続で襲ってきた痛覚に後ろを見る。すると矢を消しながら真っ直ぐ進んでくる大きな紙が目に見える。そして理解出来た、たった今と先程の痛覚の理由である矢があの紙に破壊されていた事は。いや、破壊というよりは跡形もなく消されているのか。姿が見えないあたり、恐らく二人は紙の後ろに隠れるように移動しているはず。だんだん小さくなっているような気がする紙の軌道上にある矢を動かし、紙の裏を狙うように仕向ける。近づかれた際ちらりと見えたが、相手のうちの一人は角が生えていた、つまり人外。体力勝負では相手に負けてしまう。走りながら矢を撃つという事は難しいため、追いつかれる前に今残っている矢で相手を仕留める…。

〜〜〜

「うわわっ…また矢が飛んできた…！」

紙が矢を消してくれるためしばらく安全に走れていたが、矢自体が学習したかのように紙を避け、自分達に飛んでくる。それらを素手で止めるしかない。相方の方を見ても自分に当たりそうな矢だけで精一杯に見える。手や腕に刺さる矢の痛みに耐えるしか

ない。

～～～

「これは■りましたねぇ…」

相方に言うでもなく、呟くように自分に言う。先程からあの紙のせいで矢の数が明らかに減っているのだ。もちろん何もしない訳ではなく、砂嵐を発生させ消そうとは試みるのだが…あっちの紙のほうが上手らしく、消されてしまうのだ。ただ紙が少しずつ小さくなってきているのを見る限り、時間が経てば効力が切れると見る。そのタイミングで砂嵐を飛ばして消すしかない。

～～～

「キリが…無い…!」

紙に頼りすぎたか、紙の軌道からそれて自分達を直接狙いにくる矢に紙で必死に防御するしかない。あの矢の渦から逃れる行動を起こすのが遅かったか、矢の量は大きな紙を使っても減っているという気にはなれない。体に刺さった矢の傷もあり、長く耐えれそうにもない。どうにか矢の間から逃げる相手達の方向を見る。このコロシアムのフィールドは円形状、一つの方向に逃げ続けていたら壁にぶつかる。そして相手は壁に近くなっている。ならばと思い、大きな紙を2枚、相手の左右に飛ばす。能力の消費が少し大きいが、これで相手が壁についても紙で左右に移動は出来ない。壁に追いやれれ

ば決着がつけられる。今度こそ終わらせる気で真っ直ぐ進む。

〜〜〜

しばらく走り続け、やがて目の前に壁が見えてきた。そういえばあまり考えていなかったが、このコロシアムの場は円形。中ぐらいの大きさだから一つの方向に逃げていれば壁に行き着くのは当然か。自然に右に曲がろうとするが、気づけば右からあの赤い×が書かれた大きな紙が止まっていた。左にも同様の紙。

「…しまった、行く手が…」

遠くから攻撃を再開するために相手から距離を取る事ばかりを考えていたため、フィールドの事を考えていなかった。左右の紙は動きを止め、自分達を逃さまいとしている。こうなれば選択肢は一つしかない。壁について足を止め、また新たに矢を撃ち始める。時間はないが十数本ぐらいなら撃てる、その矢を足して相手を倒すしかない。

〜〜〜

目の前の大きな紙が小さくなり、相手の姿が見えやすくなる。すると左右にあの大きな紙で行く手を阻まれている相手達が見えた。相方が急にあの大きな紙を2枚も出した意図と決意したらしい目つきで理解出来た。それに応ずるように小さく頷き、距離を今度こそ縮めていく。

〜〜〜

大きく砂嵐を出してみるもやはり消えてしまう。壁に追いやられてしまったのが理解出来る。ここで引いてもまた目の前の女に紙を飛ばされたら脱落してしまう。相方が矢を飛ばし始めたのを見ると、ここで決着がつく事になるらしい。最初に飛ばされてきた紙が消えた所を見計らって、砂嵐を飛ばすしか自分には出来そうにない。

～～～

ようやく近づけた。そう認識した所で目の前から黒い砂嵐が飛ばされる。それに対し紙で消そうとするが、周囲には紙で消しきれなかった矢がある。その矢がまた体に刺さってしまい、怯んでしまう。砂嵐の速度はそこまで速くはないが、相手の姿が見えにくい。だが、そこで相方だった着物の女がコロシアムの土の塊を大きく抉り取り、砂嵐に向けて投げ飛ばした。するとその土の塊は砂嵐によって消えるが、同様に砂嵐も消えた。お互い矢が体に刺さりつつだが、今度こそ攻撃が出来る。痛みに耐えながらどうにかまた大きな紙を作り出し、そして左右に待機させていた紙で壁以外の三方を紙で飛ばす。これで飛ばれたりしたら意味がなくなるが果たして…。

～～～

相方の出した砂嵐は、相手が投げた土で消えてしまった。しかも壁以外に動ける方向全てが紙で封じ込められた。今から矢に体を移すにも必要数の矢を撃つ時間がない。長いのか短いのか分からない時間が過ぎ、紙に書かれた赤い×がついに自分に触れる。

すぐさま自分の体は粒子となって消えていく。ふと相方の方を見るが打開策は無いらしく、同様に姿が消滅しようとしていた。今回は相性が悪かったか…

〜〜〜

リーグ1　第1回戦決着　○無邪気な正義VS弓術・プロトタイプ×

次回　リーグ2　第2回戦　温暖色に結ばれたいVS追い続ける刃

おまけのコーナー←

「YKN．23と｜」

『YKN．24の｜！』

「『第1回YKN企画番外編、YKNの全て（｜！）』」

「さて、第1回戦が終わったみたいだね。相変わらず終わり方が酷い気がするけど、中の人だから仕方ないかな。」

『まぁだから打ち切りの可能性有りって話だからいいと思うけどね！』

「まぁ確かにね。さて、このコーナーではＹＫＮを紹介鯖では書いていない事含め紹介していくよ。」
『そして今回のゲストはこの人だー!』
【……。】
「えっと…ボーッとしてるけど大丈夫?」
『…あれ?おーい!聞こえるー?』
【……あ、……うん。】
「…大丈夫みたいだね。という事で今回のゲストはＹＫＮ．１５のチセさんだよ。」
『初の版権枠だね!よろしくー!』
【ん、……よろしく…】
「さて、今回紹介するＹＫＮは以前にも少し名前を出した天間屋敷　光斬。大助さんのストーリー村で出番が安定しているキャラだね。」
『読み方はてんまやしき　れいざ!どうやってこの名前にしたのかは覚えていないみたいだけど、当時の中の人は長い名前がかっこいいって思っていたらしいよ!』
【えっと……大助さんの所とフリーダムでの光斬さんは少し性格が違ってるの。フリーダムの方では…喋る速度が遅い、のが特徴…。】
「このキャラが作られたのは中の人が鬼滅の刃を本で読んでいた時。それで何故かは知

らないけど喋る速度が遅いっていうのは鬼滅の刃キャラである黒死牟をリスペクトしたものらしいね。結構好きなキャラらしいけど。」
『対して大助さんの村の方では大違いってぐらいに普通に社交的だよ！回復技を持っていないっていう設定があるけどね！』
【光斬さんは……半人前の陰陽師。能力はもちろん、陰陽術。そして過去なんだけど…彼は種族上では半人半狐になってる。】
「ユウの紹介の時に少し触れていたけど、彼はユウの先祖にあたるとされているよ。今回も艦これストのネタバレにならない程度に説明するけど、光斬は元は人間で陰陽師の家系で過ごして来たけど、ある時祓う対象である妖（あやかし）に敗れた結果、何故か半分狐の姿にされたんだ。」
『けどその意図は明確！陰陽師が化生の姿なんて許せるか！という事で家族に勘当、捨てられて封印されて海に沈められたよ！』
【けど、何千年後に…海賊に宝と間違われて、船長に能力で封印から放たれて、無事に済んだ。ちなみに、封印だから…体は老けていないよ。】
「つまり、彼はその何千年過ぎた後でも体は封印される前の少年時代のまま。て事は彼は見た目は若造でも本当は人の寿命を遥かに越えたって話だね。老人ってレベルじゃないよ。」

『まぁ本人はそうは思っていないらしいけどね!そして海賊の元で感謝の意味で働いていたけど、やがてその海賊が解散する際に船長さんのツテで他の職場で働く事になったよ!』

【そしてしばらく職を転々として…ついに幻想郷に流れついた。さらにユウさんに会ったけど、自分の子だともちろん分かる訳がないね、ユウさんも陰陽師の後継者だって事、忘れてるから…。】

「以上が彼が幻想入りするまでの経歴だよ。さて、さっきも言ったけど彼の能力は陰陽術。火、水、風、雷、地、光、闇を単体、あるいは混ぜ合わせた術式を使っているよ。」

『例えば〝絶速光夢〟!光の槍を真っ直ぐ光速で飛ばす術式だよ!簡易術式として空を飛べたり姿を消せたりも出来るんだー!』

【光斬さんの戦績は…ユウさん程ではないけど、負けた数の方が多い。……まぁ、ユウさんより戦闘に使われていないっていうのもあるけど。】

「さて、彼の交友関係はユウや次回紹介する熊野御堂　聖月。カップリングは無しだよ。」

『という事で今回はここまでー!』

【それじゃ……また。】

食らえＤＩＯっ！半径２０ｍ以内、エメラルドスプラッシュをーっ！チームでリーグなトーナメント！４っ！

リーグ2　第2回戦　温暖色に結ばれたいＶＳ追い続ける刃　その1

温暖色に結ばれたいチーム控室

「………。」

「………。（気のせいかしら、さっきから同室の子が凄い私の事を見ている気がするのよね…。さっき話しかけたら何故か好きな色を聞いてきたから答えたらそれっきり黙って…紫色が嫌いなのかしら？）」

「………。（……紫は中性色、温暖色でも無ければ寒暖色でも無い…今なら温暖色に傾けられる。そしてその後はあそこに送り込んで…いえ、この大会が終わってからにしましょうか。）」

〜〜〜

追い続ける刃チーム控室

「ギヒヒ、コロシアムっつーんは殺しても構わねぇ場所だ、野郎共を好きに出来るときた……試合の時が楽しみだぜ…（愛用のチェンソーに付着している血舐めてる）」

「……。（あぁ…いい。いいわぁこの子、会って一目で分かった、私の欲求を満たしてくれるって…。この子の狂い具合、それを軸とした行動の一つ一つが私を満足させる…試合はまだかしら、早くこの子の色んな動きを眺めたい、もちろん対戦相手も…）」

〜〜〜

コロシアム　フィールド上

「あそこにいるのが今回の対戦相手ね、その…頑張りましょう。」

「……。（頷く）」

「ギヒヒヒ、まずはどっちから痛い目に遭わしてやるか…」

「………。（出来れば私の干渉無しの行動を見たかったけれど…まぁ、これはこれで面白そうかしら?三人共、私を楽しませて頂戴ね…）」

『それでは、第2回戦…開始!』

〜〜〜

「……さて。」

手から糸を出す。そしてそれを一直線に、直接相手を狙う。まずは小手調べが大事。鈍く光を放ってはいるが、晴れたコロシアムの下、夜でないから糸を見るには少し苦労するはず。それに、先手必勝という言葉がある。

〜〜〜

「……（糸を出す能力みたいね。それに、早く仕掛けに行っている…私もやりましょうか。）」

緑の赤い、白い光を周囲に発生させる。攻防両方に事足りるそれを幾つか飛ばす。後は引っ掛かるのを待つだけ。

〜〜〜

「行くぜ女ぁ！ついてこい！あたしが先陣を切ってやるからてめぇは後方支援をしろ！」

あたしの様子を見て薄く笑っていた女にそう言って、スイッチを入れたチェンソーを持ち直して突撃する。戦闘はまず相手の出方を見るとか言うが、あたしにそんなまどろっこしいのは似合わねぇ。最終的に勝ちゃいいんだ、内容なんざ関係ねぇ。さて、何か光が飛んできてるが愚直に真直ぐは避けろと言ってるようなもんだ。一般人と比較すれば高いと十分にいえる跳躍力でその光を無視する。他の光が追っかけてきてるが先に追いついてぶった切ればいいだけの話だ。

〜〜〜

「あらあら…活発でいいわねぇ。」

失格にならないようにちゃんと後からついていく。やっぱり予想通り、特攻型のようみたい。まぁ、私は前線に出るより支援の方が型に合うからいいんだけどね。さてさ

て、相手は光…いえ、少し見えにくいけれど糸も飛ばしているわね。あの子は糸に気づいているのかしら?光は飛んで避けてるみたいだけど…っと、こっちもちゃんと見ておかないとよね。自分の所に向かってくる光を躱し、糸を影で出来た刃で斬り伏せる。そして影で私の分身体を作る。ふふっ、相手の反応はどうかしらね…?

～～～

「来ているわね…。……かかった!」

飛ばした糸のうち一つが切られた。少し間は空くが、切った相手に問答無用で鋭い痛みを与える。もう一人は糸に気づいていないらしいが、光を避けようとした際に飛ばれたおかげで外してしまう。もう片方の手からも糸を出す。糸を自在に操れるのはいいが、デメリットは最大で指の数程、つまり１０本しか動かせない。無闇に全部の糸を飛ばすより、万が一の事を考えて残しておくのが彼女の戦法。

～～～

「……。」

やはり避けられる。けどそれだけ。まだ周囲には光を控えさせている。近づいているので目の前に光を移動させて盾代わりにする。相方の方は糸を操る邪魔になりそうなのでしない。躱しきれられるだろうけど向かわせた光を二人に向わせつつ、近づいてくるのを待つ。

～～～
「……あん？」
チェンソーに何かが引っかかる。微かに小さい異変だがあたしの目は誤魔化せねぇ。光をスルーしながらその正体を眺めると、細く、鈍い光を放つ糸が見える。なるほど、光を出す方じゃねぇ女の力ってとこか？大した事ねぇな。既に切れてんだしよ。強度もそこまでってって感じだな。そう認識した所で、体に痛みが走る。糸でも当たったかと自分の体を確認するが糸が引っかかったようには見えない。…はん、さてはさっき糸を切った時に女の別の能力が発動したらしいな。だが糸一本切ってこんぐれぇの痛みなら怯える必要はねぇ。先に倒しちまえば早いんだ。
～～～
「……あらぁ？」
おかしいわね、光も糸も避けたつもりだったのに今体に痛みが走った気がするわ。思い当たる節としたら…さっき糸を切った時ぐらいね、試合が始まってした事はそれしかないもの。ただの糸じゃなく、切るとカウンターを入れる糸…ね。
「気をつけて、お嬢ちゃん。光だけじゃなく糸も飛んできてるけど、それを切ったら反動があるみたいよ？」
一応忠告をしておいたけど、あの子なら関係なしにこのまま突っ込みそうね。さて、

痛みの方は私は問題ないわ。影で出来た衣を身に纏う。これは私自身へのダメージを肩代わりしてくれるもの。まぁ、私の代わりに分身体が糸を切って反動を受けてもその程度じゃ分身体は倒せないけど。このままあの子と一緒に分身体を突っ込ませてあげましょうか。

〜〜〜

今回はここまで。その２に続く…

おまけのコーナー←

「盗賊と」『料理人の』

『第1回ＹＫＮ企画、ＹＫＮの全て（ー!・）』

「さて、約一ヶ月近くの投稿になったけど第２回戦が始まったね。まぁ中の人の言い訳

は単純に書く時間が足りなかったらしいけど。」
『まー失踪するよりはマシということで！本編ぐらいに長くなっちゃってるからさっさと始めるよ！ということで今回のゲストさんどーぞー！』
【こ、こんにちは。ＹＫＮの２０番を務めているラムダです…今回はよろしくお願いします。】
「以前紹介したＹＫＮ．１ことユウの彼女枠だね、さて、今回紹介するＹＫＮは初のボカロ枠。ＹＫＮ．４のストレリアだよ。」
『元ネタはＶｔｕｂｅｒの聖女れりあ様とかいりきベア様のコラボ？曲、ストレリアの背景に描かれた女の子だよ！もう皆分かったと思うけど名前は曲名そのまんま！』
【ま、まずは幻想郷に来る前の物語からお話します。ストレリアさんは元の世界では見た目通りのシスターとして教会に勤めていました。】
「けれど他の宗教の陰謀かあるいは別の理由か、その教会は燃やされてしまったよ。それ以降は教会の再建活動として資金調達を地道に続けていたんだけど…」
『なんと目標額に届きそうになった所でタイミング悪く幻想郷に迷い込んでしまったよ！おかげで１からやり直しということで今は人里で資金調達を続けているんだ！』
【普段はシスターらしくお淑やかに振る舞っていますが…実は裏の顔があって、人の居ない所では気性荒くしています。そして誰も見ていない所で幻想郷に飛ばされた鬱憤

とか日々のストレスを発散するべく何かに八つ当たりをしています。】
「もし誰かに見られた場合は吹っ切れたように本性を露わにして襲いかかるよ。彼女の能力は物体を操るよ。」
『周囲の物体はもちろん、彼女の得物である鎖と棘付き鉄球を振り回すよ!本性と相まって怖いね!』
【ちなみに交友関係である熊野御堂さんとはストレス発散しているところを見られて襲った結果、害を無効にする波動とは相性が良いのか悪いのか…長期戦の末に仲良くなったという形になっています。】
「そして熊野御堂との他の友人としてユウや天間屋敷とも交友関係にあるよ。」
『さて、そして実は彼女には姉がいたんだ!それがＹＫＮ．５３ことラステリアだよ!』
【ラステリアさんはストレリアさんと同じくシスターをしていますが、アウトドアな性格で一つの教会に勤め続けるストレリアさんとは違って海外にまで活動を伸ばしているのでストレリアさんと会うのは毎日ではないんです。流石に教会を燃やされたと聞いた時にはすぐに戻ってきましたけど。】
「少し英語を交えた喋り方と性格故、ストレリアはラステリアの事をめんどくさい奴、と思っているみたいだね。さて、ラステリアの話は次紹介される時にするよ。」
『てことで今回はここまでー!』

【さ、さようなら…ユウさん、大丈夫かな…（小声）】